

資料 1 3

真猿類における四足歩行の動作分析
中務真人（京都大・理・自然人類）

本実験は旧世界ザルがいったん地上性に適応しその後二次的に樹上性に变化したという仮説を検討するため、霊長類の四足歩行の3次元歩行動作分析を行うことを目的としている。本年度は3次元動作アナライザーの設定と操作の習熟、関節位置を記録するためのマーカーの選択など実験に必要な基礎的準備を行った。関節位置を決定するマーカーとしては皮膚表面の体毛をそり落とし、約2 cm大の円形に水性蛍光マーカーで印を付けた。ケージは3 m長のもを用い、前面には記録の妨げにならないように荒いワイヤーメッシュを張った。計測範囲は約1 m四方に設定した。アナライザーの計測誤差判定を行った結果、このサイズのマーカーと計測範囲の組み合わせで、誤差が大きい場合10 mm程度発生する可能性があることが明らかになった。おおむね、上下、左右方向の計測誤差は小さいものの、奥行き方向の計測誤差が大きい。球体マーカーではなく、実際に動物実験で平面的なマーカーを用いると誤差はさらに大きくなると考えられる。この装置において同時に記録可能なマーカーは8個までなため、計測部位は前肢においては中手骨頭、手根、肘、肩（後肢においても同様）とせざるを得ないが、中手骨頭など小さい部位のマーカーを正確に補足することが問題になると考えられる。

資料 1 4

発達に伴う中枢神経組織における
組織因子の局在

平島 豊（富山医薬大・医・脳外科）
吉田淑子（富山医薬大・医・第2解剖）

これまで人を含め中枢神経組織に組織因子が豊富に存在することが知られているがその局在に関してはいまだに不明な点が多い。今回中村等の作成した抗組織因子抗体(HTF-K108)を用い、neuron specific enolase、GFAPの局在と比較する免疫組織化学的手法で脳の組織因子の局在を検討した。人、猿の脳脊髄の検討の結果、組織因子は神経細胞、グリア細胞のいずれにも存在することが分かった。しかし、猿の脊髄の神経細胞では組織因子の抗原性を認めず、中枢神経組織の組織因子の局在は種差、解剖学的部位、発達段階により、異なる可能性があり、研究を更に進めたいと考えている。